EurekaXIV

六年制通信　№22　令和８年10月23日（金）号

「あとがき」より

前回夏川草介さんの『本を守る猫の話』を紹介した折、「私がこの作家に魅力を感じ共感を覚える理由もよくわかりました」と書きました。実は最も共感したのは、「あとがき」だったのです。しかもこれほど手放しで100%の共感を覚えた文章はかつてありません。普段自分が憂えていることが見事に書かれていました。少し紹介します。

人の心が、ささくれだっている。こんな一文で始まります。一行にこの一文だけ。私はこれだけで、本当にそうだと膝を打ちました。続けて、この人は内科医ですから患者さんの変化のことを述べます。最初から医師に不信感をぶつけ「君は何年目の医者だ？」「専門医（の資格）は持っているのか？」など初対面の大人の会話として礼儀の範疇を明らかに越える、そんなことが珍しくなくなってきたというのですね。医療者の方も山のような同意書をとり難解なガイドラインで身を固め、患者への共感や理解を諦めている若い医師もいる、とのこと。とても信じられない光景ですね。

病院外でも不穏な空気が蔓延しているとし、次のように述べます。テレビの向こうでは大きな影響力を持つ政治家や学者や知識人が、平然と他者を攻撃する言葉を発し、理想を軽んじ、良識を笑い、自己の卑小な主張に汲々として、余人の意見に耳を傾けない。新聞上には、本来の文脈から切り離されて意味を捻じ曲げられた情報の断片が、過激に装飾されてあふれかえり、無闇に人の不安を煽っている。それを受け取る社会の側もまた、物事を安易に白と黒に塗り分け、答えを急ぎ、出所も明らかでない怪しげな知識に振り回され、立ち止まって考えることをせぬまま大声をあげる人も少なくない。気がつけば、あちこちに不安や不信が渦巻き、人の心から、やさしさや思いやりが失われつつあるように感じられたのである、と。私も本当にそう思います。大体昨今流行りの「カスタマー・ハラスメント」を防止する対策とか、こんなこと、昔はなかった発想です。役所からコンビニに至るまで、過度な要求や横暴な振る舞いが横行するようになったからです。人の心がささくれだっている証左のようで、恥ずかしく思います。

さらに、時代の変化が激しすぎて、十年前の常識が通じないのが現代だ。数年前の常識が現在の非常識となる環境では何が正しいのかわからなくなる。まして時代は、自由と個性の掛け声のもとに、多様化ばかりが賞賛され、ときには、異常であること、奇抜であることが優れていることであるかのような風潮さえみられる、そう嘆いておられます。これまた私は全く持って同感で、しかもこういう風潮が嫌いです。

夏川さんは、かかる時代に何が必要か、と自己に問いかけたとき、胸の内に灯ったかすかな光が、「本」であった、と述べています。激しい変化と際限のない多様性に満た

された時代の中で、しかし時を越えて変わらず受け継がれてきた名作と言われる作品たちがある。これらの作品の中には異なる時代の人々の心さえ揺さぶる普遍性がある。だから本は、変化に翻弄される我々に、変わらぬこと、変わってはいけないことを教えてくれる、と述べるのですが、これが夏川さんが一番言いたいことだと私は思います。

私もベストセラーを読んだ、あるいは古今東西の名作を読んだからといって、すぐに普遍的な人間性を知り他者に共感し理解を示すことが出来るとは思っていません。しかし、読書が時代の変化に抗うよすがとなることだけは、自信を持って言えます。

夏川さんは医療の世界から見ているわけですが、私の狭い知見でも憂えることは多くなったと思います。テレビや新聞から流れてくるのは、自分が正しい、100%正しい、自分は何も悪くない。何もかも全部他人が悪い。そういった他罰的な言動は本来発達期の子どもに見られることで、親や先生、すなわち大人はその愚かさを叱ってやるのが普通であったのに、今では大人が他罰的言動を平気でとり、偏狭な正義感を声高に他人に押しつけて恥じない、そんな報道が多くなりました。世の中は自分の思い通りにはいかないことを知り、自分とは違う価値観に囲まれ何かしら折り合いをつけていくことを学んでいくのが成長であるはずなのに、思い通りにならないと自分を常に被害者の立場に置き他罰的な言動を続ける。私は世間にあふれるこういった風潮を憂えます。つまり、子どもだけでなく大人にも「幼児性」のようなものが見られるようになった気がするのです。曽野綾子によると「幼児性」とは「自己が希薄になり、人の思惑を恐れ、人と同じでなければ不安にとりつかれるくせに人より目立ちたいという幼い自己矛盾にも気づかず、暑さ寒さ不便全般に耐えられず、自分の利益は考えても人のために尽くすことには全く反応せず、他者の存在さえあまり意識しない人」だそうです。君たちはこれを乗り越えなければいけません。ですから、せめてうちの生徒諸君は、そういった幼児性から脱却し、穏やかな心をもってたくさん勉強し、自分と違う価値観を持って生きる級友たちと共感し協力することを覚えてほしいと、切に願います。そして不易流行の不易の部分をしっかりと身につけた大人に成長してほしいと思います。京都大原三千院にある往生極楽院の阿弥陀如来の手前に「これまで起きた楽しいこと、うれしいこと、嫌なこと、悲しいこと、辛いこと、それらすべてはあなたを造ったものであり、あなたの一部であり、あなたの宝物です」と書いてあるそうです（藤原正彦『日本人の真価』）。こういうふうに思えるようになりたいですね。

＃ No.18 号で「勤靡餘勞　心有常閑」（〇）を「勤靡餘勞　心中常閑」（×）と記してしまいました。お詫びして訂正します。

今週のおすすめ

・小手鞠るい　『ある晴れた夏の朝』　（文春文庫）

9 月に行われた芸術鑑賞会、今年は観劇でしたね。演じるは劇団うりんこ。題して「ある晴れた夏の朝」。その原作がこの本です。台詞も設定も原作に忠実でしたが、やはり本の方が読み手の想像力が膨らむので、私は読書をお勧めします。

BGM は　Dream Ami の *Zoo ～君がいるから～* でした…。